

ユイスマンスとブーラン——発端

——マリア派異端とユイスマンス（その1）¹——

大野英士

0.

ユイスマンス J.-K. Huysmans (1848-1907)²は19世紀末から20世紀初頭に活動したフランスの作家である。生涯独身。普仏戦争従軍後、内務省の官吏としてつましく生計を立てる一方、エミール・ゾラ Émile Zola (1840-1902) の薰陶を受けた自然主義作家として出発し、稀代の奇書『さかしま』*A rebours* (1884) をもってデカダンスに転じた。その後、ゾラの自然主義を痛烈に批判して『彼方』*Là-Bas* (1891) なる悪魔主義の書を著した後、1892年から93年にかけて、今度は一転、「神秘主義」的な色彩の濃い峻厳なカトリシズムへと方向を変えた。そして、すでに『彼方』に登場していたデュルタルという作中人物の魂の変転を、おびただしい語彙を駆使した晦渋なフランス語でつづる「神秘主義」的作品を発表するに至った。晩年、多年に及ぶ喫煙が災いしたのか、喉頭ガンを患い、顔面の半分が崩れるほどの症状に至ったが、神から与えられた試練と観念し、一切の麻酔による苦痛の軽減を拒み、数年の闘病の後1907年にこの世を去った³。死後には、彼のキリスト者としての凄絶な生き様を偲んで、彼を慕う人々によって彼にちなんだ修道会が作られたという。

ところで、ユイスマンスのカトリシズムへの転身、そして、彼の文学の変貌に関しては、当時の宗教界の片隅でほそぼそと活動し、歴史の闇に消えた「慈悲の御業」ないし「エリアのカルメル会」と称するオカルト神秘主義的な異端の小セクトの指導者ジョゼフ＝アントワーヌ・ブーラン元神父 Joseph-Antoine Boullan (1824-1893) との交流と、その見過ごすことのできない影響があったとされる。われわれはすでに『学苑』に掲載した論考⁴により、19世紀末に起こったと推定される認識論的な切断に関して、とくにオカルティズムの観点から論じたが、ユイスマンスとブーランとの交流に関しても、この認識論的な切断は大きな影を落としている。われわれは、ラ・サレットの出現という「オカルト現象」にインスピレーションを得てカトリシズムから逸脱したブーランという人物の軌跡と彼のセクトの教説を具体的にたどり、あわせて、このブーランおよび、このセクトがユイスマンスに与えた影響の意味を考えてみたい。本稿では、その準備段階として、『彼方』執筆当時、ユイスマンスがおかれていた状況と、ブーランとの出会いの経緯を記述することとする。

I.

ユイスマンスが「19世紀のもっとも興味深い還俗神父」⁵と評されるその不思議な人物の話を耳にしたのは、1889年の秋のことだった。

ユイスマンスは、やや、いらだちととまどいを感じていた。

1887年の秋以来、彼は『彼方』という題の作品を構想していた⁶。この小説は、ジャンヌ・ダルク Jeanne d'Arc (1412-1431) が生きた中世と現代の世相を悪魔主義という観点から比較するものとなるはずだった。この点で時代をみる彼の嗅覚は確かだった。科学の勝利を謳歌する風潮の陰で、科学では説明のつかない不思議な現象、悪魔やオカルト、神秘主義などといった怪しげな事象に群がる連中が蠢いていることを、彼は知っていた。それは、降霊円卓を囲んで死者や悪霊を招来したり、町はずれのうち捨てられた教会で黒ミサを催したりする有象無象の人々ばかりでなく、実証医学の本山ともいるべきパリ大学の医学部にも及んでいた。

『彼方』執筆開始に先立つ1887年、ユイスマンス自身、医学アカデミーのジュール・ルイス博士 Jules Bernard Luys (1828-1897) がオピタル・ド・ラ・シャリテで実施した奇妙な実験に立ち会っていた。その実験は、密閉したガラスの管一本一本の中に、それぞれモルヒネやストリキニーネ、アトロピン、ナルセイン、臭化カリウムといった薬剤、あるいは草花の芳香をしみこませたアルコールなどをつめ、これを催眠術で眠らせたヒステリー患者の女性の耳元に後ろから近づけてみるとのだった⁷。するとこの患者は、管の中身については知りうるはずもなく、とくに心理的な暗示が加えられたわけではないのに、中に入った物質に応じて異なった反応をみせる。ある時は、痙攣を起こしたり、ある時は幻覚をみたり、喜びや、悲しみ、苦痛といった様々な感情を誘発する。そればかりか、瞳孔が動いたり、傷害を引き起こしたり、甲状腺が一時的に腫れたり、心臓や肺、腹部の神経に変調を起こしたりといった、身体症状まで呈する。さらに、薬剤によって引き起こされるこうした感情や身体的な反応は、6メートルほど隔てて互いに後ろ向きに座っている患者同士の間で伝染することも確認された。ジュール・ルイス博士の研究がまじめな意図で行われたことは確かだった。しかし、これは、すでに以前から、心靈術士たちの間ではよく知られた現象だった。もっとも、ルイス博士の共同研究者で彼の研究からヒントをえた「金属療法」なる治療法を唱導したアンコース医師 Gérard Encause, dit Papus (1865-1916) となると話はやや違っていた。彼は、多くの啓蒙医学書を著す一方で、オカルト結社「カバラの薔薇十字」に属するその世界の大物で、パピュスのペンネームで医学書に数倍するオカルト関連著作を発表していたのである。

しかし、ルイス博士やアンコース医師を含め、いわゆるオカルティストのいうことをそれほどたやすく信じてよいのか？ 近代化が進みつつあった19世紀の末葉、キリストが宿る聖体のパンすら、工業的に生産されたジャガイモでんぶんから作られる⁸ご時世の中で、悪魔や魔術などといってもそれは所詮、金儲けの「がたり」ではないのか？

その詳細は、別の機会に譲るとして、『彼方』におけるユイスマンスの構想を、ごく大まかにいえば、中世に生きた悪魔主義者ジル・ド・レー元帥 Gilles de Rais (1404-1440) と、ユイスマンスの時代の悪魔主義者たちの生態を比較しようというものだった。ユイスマンスは、ジル・ド・レーの生涯に関しては、すでにかなりの資料を集めている。1889年の9月には、若手の作家で、友人のフランシス・ポワクトヴァン Francis Poictevin (1854-1904) を伴って、ヴァンデ地方を旅行し、ジル・ド・レーの旧城ティフォージュの荒れ果てた印象を取材ノートに書き留めている。残りは、現代の悪魔主義者、オカルティストの生態に関する部分をどのように書くかだ。

しかしユイスマンスは執筆の構想を進めるにつれて、何となく居心地の悪さを感じていた。それは彼の芸術観や創作技法に關係していた。ユイスマンスは自然主義から出発したものの、彼の理解する自然主義は当初からゾラのそれとは異なっていた。『ルーゴン・マカール叢書』でゾラが企図したよ

うな、遺伝形質によって登場人物の性格を決定したり、それを物語の導きの糸にしたりというような擬似科学的傾向は、ユイスマンスには無縁だった。『マルト、ある娼婦の物語』*Marthe, histoire d'une fille* (1876) の第2版に寄せた序文の末尾で、彼は次のように語っている。

私は自分の目にすること、感じること、体験したこと、できるだけうまく書く。それが全てだ。

この説明は言い訳ではない。これは、私が芸術において追求してきた目的をあらためて確認しているにすぎないのだから⁹。

彼はすでに数年前から、かつて師と仰いだゾラとは徐々に距離を置いていた。『彼方』の冒頭で、ユイスマンスは自らの分身ともいるべき作中人物デュルタルの口を借りて、自らの進むべき文学を「心靈主義的自然主義」と規定し、はっきりとゾラに対する決別を宣言することになるが、それでも自然主義のある側面だけは評価している。それは、「資料の真実性、細部の正確さ、リアリズムにのっとった豊かで力強い文体」¹⁰という側面である。実際には、これほど単純な図式がなりたつわけではないが、前代のロマン派が、歴史や現実に取材しつつも、靈感と想像のおもむくままに、自由奔放に筆を走らせたのに対して、写実主義・自然主義の潮流に属する文学者は、フローベール Gustave Flaubert (1821–1880) やゾラをはじめとして、彼らが書こうとする時代や地域の社会、言語、風俗に対し、可能な限り多くの資料を集め、それを彼らの創作の中に巧みに取り込もうとした。しかし、同じ「自然主義者」の中でも、ユイスマンスの先行資料・先行テクストへの傾斜はいささか常軌を逸していた。ユイスマンスは、自らの日記やスケッチ、取材ノートであれ、他の書物や資料であれ、およそ自分の手中にあって利用可能なテクストを徹底的に再利用する。ユイスマンスの専門家は、この手法をどんなものでも無駄にはしないという意味で「ポンプ」とか、「経済原理」¹¹などと呼んでいるが、それはちょうど現代のわれわれがコンピュータ上で、先行資料をコピペーストして新しいテクストを作りあげるような具合なのだ。

たとえば、『彼方』前半の主要なテーマとなったジル・ド・レー元帥に関する記述については、ユイスマンスが『彼方』の執筆にとりかかるわずか数年前の1886年に第2版が出たユージェーヌ・ボサール神父の『フランス元帥ジル・ド・レー、別名青ひげ (1404–1440)』¹²が、ほとんど唯一の出典になっており、ジル・ド・レーの生涯をいろいろ挿話はもちろん、語句のレベルまでそっくりそのまま借用している箇所が数十にものぼり、いまならさしづめ剽窃の廉で訴えられるのではないかと思われるほどだ。同様に作中でデュルタルを悪魔主義へと誘うシャントルーヴ夫人の手紙は、そのほとんどが、アンリエット・マイヤ Henriette Maillat という実在の女性からユイスマンス自身に宛てられた手紙を文字通り引き写したものなのである¹³。

当時のサタニスムやオカルティズムに関して、当代の作家の中でも有数の読書家として知られたユイスマンスは「自然主義者」として多くの資料を集めている。すでに彼が数年前に発表した『仮泊』¹⁴には、主人公ジャック・マルルのみた三つの夢が登場するが、その最後でもっとも長いページ数を費やして描かれた夢の中には、黒ミサや魔術のおどろおどろしい場面がながながと描かれていた。さらにこの頃彼は、頼りになる協力者をみつけていた。1889年、レミ・ド・グールモン Rémy de Gourmont (1858–1915) という名の若い作家がユイスマンスが勤める内務省を訪れた。グールモンが

最近執筆した『策略』*Stratagèmes*と題する短編小説の草稿15を『さかしま』で名高い先輩作家に献呈するためだった。グールモンは当時、フランス国立図書館の司書補をしていた。そのため彼はユイスマンスのために、国立図書館の書庫深く眠る15世紀から19世紀に至る数多くのサタニスト関係の資料の収集を約束した16。

II.

ユイスマンスは彼のもとに集まつてくる多くの資料の中に、どうしても何かが欠けているという感じをぬぐうことができなかった。どうやらユイスマンスには、ジル・ド・レーも含めて、サタニストは男色者だという固定観念があったらしい。

上にあげた『仮泊』の第三の夢の中で、主人公ジャック・マルルはサン=シュルピス教会の鐘楼とおぼしき建物の中を彷徨ううちに、ある回廊に迷い込む。回廊の地面は畑になつていて、そこにはカボチャが植えられている。しかしそれはただのカボチャではなかった。

カボチャは皆びくびく痙攣し、熱を帯びて身を浮かし、カボチャを土につなぎとめている茎を引っぱろうとしていた。自分が目にしているのは、モンゴル人の尻の畑だと、ジャックはすぐに悟った。黄色人種の尻の植わった畑にいたのだ17。

すると、回廊に通じる固く閉ざされた扉の向こうから突然、物音が聞こえ、ジャックは、なぜとも知らず、そこに「ようやく女らしい体つきになった若い娘たちによって呼びだされた悪魔たち、男をほしがる真っ赤な噴火口を求める怪物たち、冷たい精液の夢魔たち」が蝋集してきているのを察知する。その時彼は、15世紀の魔術研究家デル・リオ Martin Antoine Del Rio (1551-1608)¹⁸の『魔法大全』にでてくる「悪魔が威をふるうは、魔術師たちがソドムの悪行にふける時なり」というラテン語の章句を不意に思い出して慄然とする。彼の理解によれば、先ほどのカボチャ畑は、魔術師たちが「ソドムの悪行」にふけるために開かれた黒ミサをあらわす形象だったのだ。

ユイスマンスは自分の本を完成させるためには、正真正銘の悪魔主義者、つまり男色者で実際に黒ミサを執行する魔術師が是非とも必要と考えていた。もちろん、正式の黒ミサを執行するためには、その人間はカトリックの司祭でなければならない。1890年2月6日、ユイスマンスは数年来の知己であるベルギーの作家、アリージュ（アリヘイ）・プランス Arij Prince (1860-1922) に宛てて、次のように書き送っている。

私は、黒ミサを行う悪魔主義者、男色者の神父を捜して奔走していました。私の本のためにはそういう人間が必要なのです。そのため、私はオカルティストの世界に足を踏み入れなければなりませんでした。——彼らときたら、何とおめでたい連中なんでしょう、何といいかさま師ぞろいなんでしょう¹⁹。

実は、この手紙を書いた前日、すでにユイスマンスは彼が「悪魔主義者で男色者」と信じたある神父に手紙を書いていたのである。いや、その当の人物は、カトリック教会から破門され、とうに神父

の資格を喪失していたのだから元神父というべきか。

恐ろしくもおぞましい言行によって当代のいかなる悪魔主義者の顔色もなからしめるというこの人物こそ、ジョゼフ＝アントワーヌ・ブーランその人である。

III.

ユイスマンスがこの人物の名を何時どういう形で耳にしたかは定かではない。ユイスマンス晩年の秘書ジャン・ド・カルダン Jean de Caldain の記述によれば、全ての始まりは 1989 年の 9 月のある晩、セーヌの河岸に店を広げて営業していた古本屋の店先で、ユイスマンスが創刊されたばかりの雑誌『高等研究雑誌』に、ジョアネ博士と署名された記事を目にしたことだったと証言している²⁰。「秘教教理の基本文書と伝統に関する知識」と題されたこの奇妙な記事に驚いたユイスマンスは、さっそく同雑誌に寄稿していたスタニスラス・ド・ガイタ Stanislas de Guaïta (1861-1897) に宛てて彼の身元を問い合わせたのだという。一方、ロバート・バルディックはこれとは別の証言を採用している。ユイスマンスにこの「脱落司祭」に関する情報をもたらしたのは、年下の自然主義作家ギュスターヴ・ギッシュ Gustave Guiches (1860-1935) であるというのだ。それによれば、ユイスマンスはこの作家から『ランティクレリカル（反教権）』の編集長ロカ神父 Paul Roca (1830-1893) がブーラン率いるリヨンの小セクトと関係を持っているという話を聞きつけた。ところがロカ神父はユイスマンスからの手紙に答えて、自分はもうすでにブーランのセクトとは関係ないといい、ブーランについてはむしろオズワルド・ヴィルト Oswald Wirth (1860-1943) か、スタニスラス・ド・ガイタも、ともにオカルト結社「カバラの薔薇十字団」の大立て者である。

「薔薇十字」というオカルト結社については、すでにアンコース博士＝パピュスの項でその名がでた。名前は「薔薇十字」だが、ヴィルト、ガイタ、パピュスらの薔薇十字は、17 世紀の薔薇十字運動、「薔薇十字友愛団」とは直接の系譜関係は全くない²¹。

19 世紀後半、オカルトや神秘主義への関心が深まるにしたがい、オカルティストたちの中には、名高い「薔薇十字」にちなんでその名を冠した結社やグループをつくるものが現れたが、1888 年にスタニスラス・ド・ガイタによって創設された「カバラの薔薇十字団」もそうしたオカルト＝魔術的結社のひとつである。

1889 年の時点で、ブーランは、ヴィルト、ガイタ、ジョゼファン・ペラダン Josephin Péradin (1858-1918) ら、この「カバラの薔薇十字」系のオカルティストたちとの間で、2 年来の「オカルト大戦争」のさなかにあった。1887 年、ガイタとヴィルトは、自分たちが集めた資料にもとづいて秘儀法廷でブーランへの死刑判決を下していた。一方、ブーランはといえば、この判決が魔術を用いて執行されるものと信じ、それに対する対抗手段を準備していた。

1980 年の 1 月末、ユイスマンスはガイタとヴィルトに手紙を書き、ブーランに関する情報の提供を求めた。ガイタは丁重に断った。一方、ヴィルトは「人間が犯す常軌を逸した行いの中でも、もっとも危険な行いから世の人々を守る」ために、自分が持っているあらゆる情報を提供すると約束した。ヴィルトとの会談は、さっそく翌月の 2 月 7 日に行われた。この時ユイスマンスの残したメモが示すとおり、ユイスマンスのヴィルトに対する印象は最悪だった。

O. ヴィルト——口舌たどたどしいいかさま師——は、ブーラン師が悪魔主義者であることを否定している。(ヴィルトによれば) ブーランはナウンドルフィストで、偉大な王の到来を期待しており、教皇になりたいと思っている、云々²³。

ここでいうナウンドルフィストとは、19世紀に数多く現れた偽王太子の一人、シャルル=ギヨーム・ナウンドルフ Charles-Guillaume Naundorff (v. 1785-1845) およびその子孫の支持者のことである。ルイ16世 Louis XVI (1754-1793) とマリー・アントワネット Marie-Antoinette (1755-1793) の第2子ルイ=シャルル Louis-Charles (1785-1795) は、1795年6月8日、革命暦3年草月20日にタンブル城の塔で獄死したとされるが、実はこの時死んだ子供はルイ=シャルルの替え玉であり、本物の王子は、実は密かにタンブル塔から救い出されたという噂が流れた。革命後、この噂をもとに、実は我こそが、その救い出された王子であると主張する人間が続出し、それぞれその周囲に支持者を集めてフランス王家の継承権を承認するよう主張した²⁴。しかも、当時流行の終末論や救世主願望、千年王国説などと相まって、それらの多くのグループがオカルティズムに傾斜していた。「偉大な王の到来」という記述は、そういう文脈で読まれる必要がある。

このメモにみられるユイスマンスのヴィルトに対する悪感情は、ブーランと薔薇十字とのオカルト戦争において、両者に対するユイスマンスの態度に少なからず影響を与えたようだ。ヴィルトはユイスマンスがブーランと直接交渉を持つことを妨げようとした。が、すでにユイスマンスはヴィルトと面会する以前に、ブーランとの接触に成功していた。仲介をしたのは、レミ・ド・グールモンの愛人ベルト・クリエールだった。

IV.

ベルト・(ド)・クリエール、本名カロリーヌ=ルイーズ=ヴィクトワール・クリエール Caroline-Louise-Victoire Courrière (1852-1916)。1852年、北仏リールの生まれだから、ユイスマンスの前に現れた時、彼女は37歳。ユイスマンスより5歳年下になる。22歳の時にパリにやってきたベルトは、ジョルジュ・サンド Georges Sand (1804-1876) の女婿で、彫刻家・画家のオーギュスト・クレザンジェ Jean-Baptiste-Auguste Clésinger (1814-1883)²⁵の愛人となり、彼の姪にして、ド・クリエール氏なる架空の貴族の妻というふれこみで、社交界に出入りするようになった。あからさまにドゥミ・モンデーヌ（高級娼婦）と記述している伝記もある。クレザンジェは彼女の豊満な肉体をモデルに、多くの大理石像を残している。1883年にクレザンジェが他界した後、ベルトは1886年に、レミ・ド・グールモンの愛人となつたが、表向きは彼のことを「従兄弟」と呼んでいた。彼女は1890年夏と、1906年、ブリュージュとブリュッセルで騒ぎを起こし、二度とも、精神病院に強制入院させられている。

このような経歴の彼女がセーヴル街のユイスマンス宅を訪ねてきたのは1889年の10月の終わりである。11月2日付のアリージュ・プランス宛ての書簡にユイスマンスは書いている。

私はこここのところ何となく女に縁があります。先頃も、デ・ゼッサントに恋した高貴な伯爵夫人の訪問を受けました。メリヤ・ロランの店で食事をして別れた後で、彼女は私に寝ないかと誘

いの手紙を書いてよこしました²⁶。

ユイスマンスの言葉を信じるなら、この時はユイスマンスの側が彼女の誘いを拒絶したらしい。あんな金持ちの女と寝たら、自分が「ひも」のようになってしまう。それに、あの女といふと、ユイスマンスは何とも不安な気持ちになるのだった。豊満な肢体を誇りながら、奇矯で不安定な精神を持つ女。ベルト・クリエールは、ユイスマンスを取り巻く何人かの女性とともに、『彼方』の主人公デュルタルを黒ミサへと誘う運命の女シャントルーヴ夫人の造形にひと役買うことになる。

文学者を愛人に持ち、ユイスマンスにも秋波を送りながら、ベルト・クリエールが恋愛対象として追いかけていたのは実は聖職者だった。その執着ぶりは、「聖具室の妖婦」というあだ名までたてまつられるほどで、オカルト界にも頻繁に出入りしていた。

V.

ユイスマンスはベルト・クリエールからブーランに対する情報を受け取ると、1890年の2月6日にリヨンに住むブーラン宛てて、長い手紙を書いた。これはヴィルトとの会見の2日前にあたる。この手紙の中で、ユイスマンスはブーランに自分の小説への協力を求めた。

私は現在ある小説を準備しています。私はその中で、19世紀の物質主義に、現代の悪魔主義の研究を対置したいと考えています。ジル・ド・レーの生きていた中世以来、ギブル師を経て、悪魔主義という、ある種、壯麗な悪が現代に至るまで脈々と存続していることを示してみたいのです。(中略) 私は資料を求めて、オカルティストの人々、パリのいわゆる悪魔主義者の面々に話を持かけました。彼らは、私に協力すれば、宣伝効果が莫大で確実であることを知っていますから、大いに気をそそられました。というのも、私の本は、それなりの部数が出ていますし、ジャーナリズムで激しい議論の的になっているからです。たとえばその中の一つ『さかしま』は、自然主義から発した、現代の文学の動向を決定づけるものでした。

ところが、この人々の話は立ったまま居眠りをしてしまうほど退屈なもので、また彼らの語る理論も駄弁が多いだけ、馬鹿さ加減が際だつような体のものでした。いずれにせよ、いかなる魔術の効果も示すことはできませんでした。

私にいわせれば、彼らは全く無知蒙昧の徒で、どうしようもない馬鹿者ぞろいでした。

さて、これ以上、くだくだしい前置きを述べるのはやめにして、用件に移らせていただきます。何度も恐怖をもってあなたの名前が口にされるのを耳にしました。そのことから、私はあなたに対し高い評価を抱くに至りました。巷間にささやかれる噂を信ずるなら、いにしえの秘儀に通じ、ただの理論だけでなく、実践においても成果を出すことができたのはあなただけだという話です。否定することのできない現象を作り出すことができるのは、あなたであり、あなただけなのです。(中略)

質問させていただけますでしょうか？ 率直にお聞きした方が、よいと思います。あなたは悪魔主義者なのでしょうか？ また、あなたは女陰夢魔に関して、私に情報を提供することができますか？ デル・リオ、ボダン²⁷、シニストラーリ²⁸、グール²⁹といった人々もこの点に関して

は全く不十分な情報しか与えてくれません。

単に、魔術の手ほどきをしてくれとか、秘密を教えてくれとか頼んでいるわけではないのです。あなたがお持ちの確実な資料、経験にもとづく結果をお示し頂きたいとお願いしているのです。個人的には、私はこの問題に関しては中立的な立場をとっております。また、私の本のためにはそうである必要があるのです。(以下略)³⁰

ブーランは、ユイスマンスの手紙の翌日すぐに、やはり長い手紙をユイスマンスに書き送った。彼は14年来リヨンに引きこもっており、ユイスマンスの文名や彼の作品に関しては全く知らなかった。ブーランは自分はオカルティズムの奥義に通じ、あらゆる悪魔主義的教会に対して戦っている者ではあるが、自分が天から与えられて所有している力は、悪魔的所行とは全く無関係であると断った上で、ユイスマンスが女陰夢魔をはじめとする悪魔現象に関心を持ち、あまつさえ、それについて今まで書こうとしている理由を尋ねた。

夢魔や女陰夢魔の問題に関しては、その通り。私はこの恐ろしい主題について多くのことをご教示できます。この問題について、私以上に資料を持っている人間はありません。しかし、その前に、あなたが何をしようと思われているのかを知りたいと思います。

私が目的にしているのは、人類の大義だけです。これほど恐ろしい秘密を暴露しようという、あなたの目的は何なのですか？ 私が是非知っておきたいのはその点です。私は実に多くの人々を、とりわけ修道女を直してきました。夢魔の災厄は、とりわけ修道院に蔓延しているからです。

それから、この問題は堕落の問題に關係があります。それゆえ、あらゆる問題を引き起こします。ですから、おそらくあなたがご存じない事実をお話しする前に、あなたが書かれる書物の目的をお聞きしたいと思います。

ご存じのように、修道院は秘密を外部に漏らすことはありませんし、シニストラーリも大して重要なことは明らかにしていません。あなたが引用している著者たちがあなたが知りたいことを教えてくれなかったことはわかります。彼らはそうするつもりも、そうしたいとも思わなかったのです。どうか、あなたの書かれたものを読ませてください、等々。

J. A. ブーラン博士、入信者名ジョアネ博士³¹

ユイスマンスは、さっそく第二の手紙を書き、彼の意図は、「悪魔主義を称揚することではなく、悪魔主義が現在も生き残り、力を振るっていることを、人々に知らせる」ことだと説明した。ブーランはついに、ユイスマンスに作家の資料収集に協力すると約束した。

悪魔主義がどのように、どんな形で現代に命脈を保っているかを示す資料をあなたのもとに届けましょう。あなたの作品は19世紀における悪魔主義の歴史をしるした金字塔として後世に残ることになるでしょう³²。

VI.

ブーランは約束を守った。悪魔主義に関して、オカルティズムに関して、大判の紙に細かい文字でびっしりと書かれた書簡が平均して週2回という規則正しいリズムで、怒濤のようにリヨンからパリのユイスマンスの自宅へと送られた。ユイスマンスは1890年の2月26日と7月24日、文通相手のアリージュ・プランスに次のように書き送っている。

私は相変わらず私の小説に取り組んでいます。ようやくジル・ド・レーが形になってきました。
しかし、何て厄介な仕事でしょう！

現代の悪魔主義に関しても、中世の悪魔主義と平行して作業を進めていますが、幸いなことにこちらの方は、私の神を恐れぬ神父が毎週資料を送ってくれています。あの老いぼれの怪物は、
実にすばらしい人間です³³。(2月26日)

私は相変わらずがむしゃらに仕事をしています。あの破廉恥な神父はたいした奴です。彼は私
のためにものすごく働き、現代の悪魔主義に関するもっとも驚くべき情報を提供してくれています³⁴。(7月24日)

ブーランの協力を得て、『彼方』の執筆は急速なピッチで進められた。しかし、ユイスマンスは、
ブーランのもたらす情報や彼の異端グループの教義がどれほどの射程を持ち、この奇妙な司祭との出
会いが、彼自身の人生や文学に今後どれほどの影響をもたらすことになるのか、知るよしもなかった。

それでは、このブーランとはいかなる人物であり、彼の思想とはどのようなものであったか？ 次
稿以降、われわれは彼の生涯をたどり、彼の教説の要点、そしてその思想がユイスマンスの文学にど
のような影響を与えたかを順次追っていきたい。

註

- 1 この論考は筆者が現在執筆中のユイスマンスに関する研究書『ユイスマンスとオカルティズム（仮題）』（新評論社より近刊予定）を構成する1章として構想されたものをもとに、加筆・修正したものである。
- 2 本名、ジョルジュ＝シャルル Goerges-Charles。早世した実父がフランドルの出身だったため、それにちなんで、作家自身が「フランドル風」と信じたジョリス＝カルル Jorris-Karl を筆名とし、後には、略してJ.-K. というイニシャルのみを用いた。
- 3 したがって、本年2007年は、彼の没後100年にあたる。
- 4 「神の死」^{デイヌヌヴィエミテ}とオカルティズムの猖獗—“19世紀的なるもの”をめぐって オカルトの世紀と聖母マリア（その1）昭和女子大学『学苑』平成18年9月号、「オカルト現象としての聖母マリア—オカルトの世紀と聖母マリア（その2）」昭和女子大学『学苑』平成18年11月号、「サレットの“異端”と19世紀末の意味—オカルティズムと聖母マリア（その3）」昭和女子大学『学苑』平成19年3月号。
- 5 『彼方』*Là-Bas*, Gallimard, Coll. «Folio», 1985 に付された、イヴ・エルサン作成の「事項索引」による。
以降、『彼方』の引用は同版による。
- 6 翌1888年の4月末、ユイスマンスはジュール・デストレ Jules Destry (1863-1936) 宛の手紙の中で、

「やっとのことで『彼方』を書き始めたが、『近代芸術』*Art Moderne*を補完することになる美術批評を仕上げるために、仕事を中断した」と語っている。*Lettres inédites à Jules Destrée*, Droz, 1967. ただ、この時点では、ユイスマンスは、作品の冒頭部分で語られるマチアス・グリューネヴァルト Mathias Grünewald (v. 1475/80–1528) のキリスト磔刑図をみていない。『彼方』成立、というより、ユイスマンスの後半に決定的な影響をもたらすこの磔刑図を彼がはじめて目にすることは、1888年の夏、ドイツ旅行の途中に立ち寄ったカッセルの美術館においてである。10月31日付のアリージュ（アリヘイ）・プランス宛の手紙の中で、ユイスマンスはあらためて「私の本を書き始めた」といっている。J.-K. Huysmans, *Lettres inédites à Arij Prins*, 1885–1907, Droz, 1977, p. 146. この時期に作家が集めた膨大な資料、この時期に作家の身辺に起こった様々な事件が、こもごも、作品の中に取り込まれていくことになる。

- 7 Foveau de Courville, «La médecine dans l'œuvre de Huysmans», in *Chronique médicale*, 1^{er} septembre, 1927, p. 285.
- 8 J.-K. Huysmans, *A rebours*, p. 346.
- 9 «Avan-propos de la deuxième édition» à Marthe, *histoire d'une fille*, in *Oeuvres Complètes de J.-K. Huysmans*, II, 1928–34, Slatkine Rep. 1972, p. 9.
- 10 *Là-Bas*, Gallimard, Coll. «Folio», 1985, p. 30.
- 11 ミッシェル・バリエールの用語。Cf., *Là-Haut, ou N.-D. de la Salette*, édition critique de Michèle Barrière, P. U. de Nancy, 1988.
- 12 L'abbé Eugène Bossard, *Gilles de Rais, Maréchal de France dit Barbe-Bleue (1404–1440)*, 2^e éd., H. Champion, 1886.
- 13 Pierre Cogny, «Écriture de la destruction: transcription romanesque des lettres d'amour authentique dans *Là-Bas*», in *Revue des sciences humaines*, 170–171, 1978, pp. 185–193. による。
- 14 *En rade*, Gallimard, Coll. «Folio», 1984. 以降『仮泊』の引用は同版による。
- 15 後に、『幻惑的な物語』*Histoires magiques*, Mercure de France, 1894 に収録された。
- 16 Robert Baldick, *Vie de J.-K. Huysmans*, Denoël, 1975, p. 171 et sq. 最近、定評のあるこのユイスマンスの伝記の英語による増補版が出た。Robert Baldick, *The Life of J.-K. Huysmans*, With a foreword and additional notes by Brendan King, Dedalus, 2006.
- 17 *En rade*, p. 190.
- 18 当時スペイン領だったベルギー、アントワープ生まれの神学者、魔女学者。主著『魔法大全』*Disquisitionum Magicarum Libri Sex* (1599)。
- 19 *Lettres inédites à Arij Prins*, p. 182.
- 20 Jean de Caldain, «La Genèse de «Là-Bas»», in *Revue des Français*, 10 avril 1914, p. 231.
- 21 Robert Baldick, *op. cit.*, pp. 192–193.
- 22 真正の薔薇十字に関しては、その発祥の地であるドイツはもちろん、それが伝播したフランス、イタリア、イギリス、さらに海を越えてアメリカなど欧米圏においてすでに、おびただしい数の文献・研究書が著されている。また、日本においても、複数の翻訳や紹介の書物が出ているので、詳しくはそちらを参照して頂きたいが、その実態に関しては現在でもなお未解明の部分も多い。1614年から1616年にかけて、ヘッセンのカッセルおよび、シュトラスブルグで、『ファーマ・フラテルニタス（友愛団の名声）』、『コンフェッショ・フラテルニタス（友愛団の告白）』、『化学の結婚』と題された小冊子が相次いで刊行された。これらの書物には、ドイツ人貴族で、ダマスカス、エジプト、フェスなど長く中東の地を徘徊・修行して天界と人間界の神秘に通曉したクリスチャン・ローゼンクロイツなる伝説的人物が創始し、世界の全面的な改革を目指す宗教結社「薔薇十字友愛団」の教義が記してあった。多くの研究者は、一連の薔薇十字運動の著者を、『化学の結婚』の編者として名前のあがっているヴュルテンベルク公領チュービンゲンの神学生、ヨハン＝ヴァレ

ンティン・アンドレーエ Johann-Valentin Andreae (1586–1654) を中心としたグループであると考えているが、17世紀の初頭、「薔薇十字友愛団」なる宗教結社が現実に存在したという確証はなく、むしろ、それは架空の団体に仮託された思想運動、政治運動であったというのが事実に近いらしい。イギリスの女流歴史家フランセス・A・イエイツ Frances A. Yates (1899–1981) は、薔薇十字運動の背後に、ファルツ選帝候フリードリヒ5世 Friedrich V ou Frédéric V (1596–1632)を中心としたドイツ・プロテスタン＝宗教改革勢力の世界改革プログラムがあったと想定している。ドイツの薔薇十字運動は、フリードリヒの没落以降、急速に衰えるが、しかし、18世紀以降、フリーメーソンやオカルティズムなどと「薔薇十字」を冠した多く「秘密」結社が作られた。Cf. フランセス・A・イエイツ著、山下和夫訳『薔薇十字の覚醒』(工作社、1986年、1992年、第4刷)。

- 23 Jean de Caldain; *op. cit.*, p. 232.
- 24 偽ルイ17世については以下の記事を参照。«Louis XVII (les faux)», in *Grand Dictionnaire Universel du XIX^e siècle*, Larousse, t. 14, pp. 715–716.
- 25 ロマン派の彫刻家、画家。同じく彫刻家だった父の手ほどきを受け、1843年にパリ・サロンに初めて出品。『蛇にかまれる女』(1847年、オルセー美術館所蔵)はスキャンダルを引き起こす。肖像彫刻に優れ、主な作品に、女優ラシェル像や、作家テオフィル・ゴーティエ像、サバチエ夫人像(ルーブル美術館所蔵)、リュクサンブル公園のルイーズ・ド・サヴォア像などがある。1847年ジョルジュ・サンドの娘、ソランジュ Sollange と結婚し、1849年に娘ジャンヌ Jeanne が生まれたが、1855年に離婚。クレザンジェはベルト・クリエールをモデルに、2体のレピュブリック(共和国の寓意像)を制作している。そのうちの1体はマドレーヌ寺院に収蔵されているという。
- 26 *Lettres inédites à Arij Prins*, p. 177.
- 27 Jean Bodin (v. 1530–1596): 政治学者、経済学者、オカルト研究家。
- 28 Ludovico-Maria Sinistrari d'Ameno (1622–1701): フランシスコ会士、パヴィア大学哲学・神学教授。
- 29 Johann Joseph von Görres (1776–1848): ドイツ、コブレンツ生まれのカトリック系の政治学者、パンフレティスト。ユイスマンスは彼の『キリスト教神秘主義』*Christliche Mystik* (1836–1842) の仏訳より悪魔主義や魔術に関して多くの情報を得た。
- 30 *Lettre à l'abbé Boullan datée du 6 février 1890* (Manuscrit), Archives Boullan, Fonds Lambert 75, Bibliothèque de l'Arsenal, Paris.
- 31 *Lettre de l'abbé Boullan datée du 7 février 1890* (Manuscrit), Archives Boullan.
- 32 *Lettre de l'abbé Boullan datée du 10 février 1890* (Manuscrit), Archives Boullan.
- 33 *Lettres inédites à Arij Prins*, p. 188.
- 34 *Lettres inédites à Arij Prins*, p. 200.

(おおの ひでし 総合教育センター)